

「大工道具と建築・文明・環境の関係を探る」

竹中大工道具館の渡邊晶さんの講演会を聴いてきました。

『建築技術比較発達史の研究』（中央公論美術出版）などの本を出されていて、斧を起源とする木の建築をつくる道具の研究、打製石器時代からの海外と日本の比較のお話などでした。

大工道具として、斧・ノミ・のこぎり・カンナ・墨つぼの5種類。要旨の結論は、「のこぎり」と台カンナを両方との引き使いしているのは、ユーラシア大陸東端の島・日本以外見ることができない」ということでした。

地震分布との関連で、地震が少ない→固い建築の欧州であり、地震が多い→柔らかい建築の日本→接合部の重要性を求める→木の加工精度を求める→道具のこぎり」と台カンナが引き使いとなる、ということのようです。

また、植生分布との関連では、広葉樹（硬木）の分布する地域では押し使い、針葉樹（軟木）の分布地域では引き使いのようです。

欧州→土台・ホゾ・木栓、日本→基石・貫・くさびの造りであり押し使いか引き使いか、道具の歴史と建物の造りの密接な関わりを知ることができました。

また、道具の使う姿勢は、欧州が立ち、中国が中腰、日本は座りながら使用する様子が当時の絵画・絵巻に描かれているようです。

名匠は、にぎるところがないカンナ（写真4枚目中央右端）を好み、自分でにぎる場所を判断（場面によって握る場所を調整する）できるものを使用するそうです。

のこぎりの刃の薄さは日本のものが大変薄く、のこぎりの刃先の微妙な振動を感じとれる形式となっているとのことでした。

日本の継手は、非常にたくさんあって複雑に思えるけど、大きく分類すると17種類の継手の分類になり、その組み合わせで構成されているそうです。

講義では道具の様々な形の並ぶスライドを見せていただきました。道具の中に、それを造った人の心を感じ、それを所有し使用している人の心が生きているということを感じることができました。

もうひとつの講義は岐阜県高山のオークビレッジ木造建築研究所「設計・素材・技術の循環社会を目指して」でした。

（報告 黒野晶大）

